

方言調査の結果を生かした三重大学生による授業の検証

— 四日市市南部地域の小学校における実践に基づいて —

余 健*

**Analysis of classes by Mie University Students Utilizing the Result of Dialect Survey
On the Basis of the Practice in Elementary Schools in the Southern Areas of Yokkaichi**

Ken Yo

要 旨

2009年度以降、三重県四日市市南部地域で継続してきた臨地方言調査の調査結果を生かした三重大生による各小学校での授業の内、2011年2月に実施した水沢小学校での授業に焦点を当て、その成果と課題の検証を行った。三重のことばに自信を持っていない若年者が多い中、公教育の場で、ビデオ教授等を有効に活用しながら、方言を題材に取り上げる意義は大きいといえる。

1. はじめに

1-1 本研究の概要と目的

2008年度までの熊野での方言・民俗調査を地域の小学校に生かす取り組みにおける研究の枠組みは、次に挙げる内容であった(余・丹保・鈴木 2009)。

「情報過多の現代において見失いがちな自分自身の存在価値をまず再認識し、次いで地域内の自分とは違った価値観を共有することで、自分の地域の良さも認識し、更なる段階では、他地域の価値観も許容できていけるような一連の「自己の存在価値の確認とその相対化」のプロセスを深め、且つ広げていけたら大変意義深いことだと考える。そして、そのプロセスが子供の健全な「生きる力」の再生につながるものとする」

熊野での取り組みに基づき、当時よりもさらに社会の閉塞感が強まってきている中、2009年度以降は、上述の枠組みに基づく意義を更に深化させることを目指して、四日市市南部で鈴鹿市北部に接する農業地帯(水沢地区・小山田地区・内部地区・河原田地区)と伊勢湾に面した塩浜地区(磯津町以外)の高年層を対象**にまず、調査票に基づく方言調査を順次実施してきた。調査項目は生活語彙(①遊びに関する語彙②農業に関する語彙③動作に関する語彙④性向語彙(「ずるい」や「うらやましい」等の言い方)⑤動植物の語彙)である。各地区の調査の様子は、ビデオカメラとデジタル録音機で収録した(以上までを余担当前期開講授業内に実施)。

ついで、余担当の後期開講の授業内で、受講生によって調査結果(ビデオ画像等や回答結果)の編集・

* 三重大学教育学部

** 水沢地区 22 名、小山田地区 24 名、内部地区 23 名、河原田地区 12 名、塩浜地区(磯津以外)24 名の 60 代以上の方(各地区男女ほぼ半々)を対象とした。

言語地図等への教材化、指導案の作成がグループワークの形式で進められた。授業全 15 回の 14 回目時には、坂 正春先生（元水沢小学校校長）と小山田・内部、河原田、塩浜の各小学校の校長先生に、指導案や教材についての事前指導を頂いた。そのアドバイスを生かし、導入の工夫や発問の仕方、教材等を改善し、リハーサル後授業実践に臨んだ。授業は、上記各小学校において、3 年生から 6 年生までのいずれかの学年のクラス 1 時限分の授業を提供いただき、チームティーチングの形式で、受講生が取り組んだ。それらの概要は、以下の表 1 に示すとおりである。

(表 1) 四日市市南部地域における三重大生による授業の取り組み一覧

①2010 年 2 月水沢小学校で 5 年生各 1 クラスを対象に授業（題材：選び歌、じゃんけん、組分けじゃんけんの様々な方言に触れることによりことばの面白さに気づく）を実施。
②2011 年 2 月に水沢小学校で 5 年生各 1 クラスを対象に授業（題材：組分けじゃんけんの言い方の世代差・地域差から見てくること）を実施。
③2011 年 2 月に小山田小学校で 6 年生 1 クラスを対象に授業（題材：「へび」の言い方の地域差や語源・アクセント）を実施。
④2012 年 2 月に内部小学校で 5 年生 3 クラスを対象（題材：「とうもろこし」や「彼岸花」等の高年層の言い方を通じて方言の大切さについて考える、他 2 つの題材）に授業を実施。
⑤2013 年 2 月に河原田小学校で 5 年生 2 クラスを対象に授業（題材：お手玉やめんこの四日市市南部の高年層の言い方の地域差を通じて河原田地区の方言の特徴を考える）を実施。
⑥2014 年 2 月に塩浜小学校で 3、4、5 年生の各 1 クラスを対象に授業（題材：「えんぴつの尖っている様子」の四日市市南部の高年層における言い方の違いを通じて塩浜地区（磯津以外）のことばの特徴を考える、他 2 つの題材）を実施。

さらに、各小学校で授業を実施した放課後、事後研修会を開催頂き、四日市市教育委員会指導課の先生方や各小学校で授業を御提供くださった先生方、校長先生より、御指導を賜った。

以下では、上記余担当授業の受講生が取り組んだ授業の中から、②2011 年 2 月に実施した水沢小学校 5 年生を対象にした授業に焦点を当て、その成果と課題について検証を行う。

2. 方言調査の結果を生かした授業とその検証

2-1 世代間で共通に使用している方言形を題材にした授業

2010 年 2 月の水沢小学校での授業実践（表 1①参照）後の事後研修会で指摘を受けた主な改善すべき点は以下の 3 点であった（余 2011）。

- (1) お父さん・お母さん世代のビデオ映像もあったら、もっと良かった。
- (2) 各ビデオ教材を見せて、何を感じさせたかったのかをもう少し明確化すべきではないか。
- (3) 子ども達は、ことばに年代差や地域差があることは、既に気付いていることではないか。

そこからさらに、特に「どうしてそのような地域差が生じるのか」という点について、授業時配布資料（四日市市内の小学生における組分けじゃんけんの言い方の言語地図）をもっと使って、普段の生活との関わりの中から考えさせるべきではなかったか。

上記 3 点の改善に特に焦点を当て、次年度の 2011 年 2 月に以下の指導案に示す授業が、再度、水沢小学校で実施された。

水沢小学校第5学年国語科指導案

2011年2月15日実施 於 水沢小学校

授業者：三重大学教育学部生 松井秀徳 森 希望 森本裕之

I. 単元 「組分けじゃんけん」(第5学年)

II. 本時の目標

1. 地域や年齢による言い方の違いに気付くことができる。
2. 自分達が使っている言葉の表現とは別の表現があることを知り、またそれ自体にも興味を持つことができる。
3. 自分たちの地域の言葉に愛着を持ち、言葉を大切にすることができる。

III. 学習過程 (45分) [図1]

学習の流れ	時間	児童の学習活動	指導者の働きかけ(◇)と留意点(◆)
1. 導入	5分	○日常生活から「組分けじゃんけん」を考える。	◇教師が日常生活の体験から「組分けじゃんけん」を使う場面の「劇」をする。 →児童たち(大学生)がドッジボールを始めるときにチーム分けの仕方では喧嘩になる設定。 → <u>写真①</u>
2. 展開	5分	○自分たちの普段使っている「組分けじゃんけん」を確認する。	◇数人の児童を指名し、自分の使っている組分けじゃんけんを発表してもらう。 →T: みんな普段チームに分かれる時にどんなかけ声をする? J: グッパーインジャンシ
グループワーク	1分	○日本の各地の言い方を知る。三重県の大きな傾向(ゲーとパーを使うこと)も確認する。 ○地域によって言い方の違いがあることに気づく。	◇日本地図を利用し、各地の言い方の大きな傾向(ゲーとパー、ゲーとチョキ)を確認させる。 →日本地図の拡大資料を黒板に貼る。 色分けの説明をする。→ <u>写真②</u>
	7分	○四日市市内の言い方を知る。 ○地域によって言い方が異なる原因を考える。	◇グループ(6人班)の形になるように指示。 →T: グループごとに、四日市市内の地区別の言い方を記した資料を配布。 →黒板に同じ資料を貼る。→ <u>写真③</u> ◇四日市市内地図から四日市市内の言い方の違いと原因についてグループで話し合わせる。 → <u>写真④</u> →T: 資料から気付いたこととその原因(どうして、同じ四日市なのにこんなに差が出るのか)を考えてみよう
全体で交流	7分	○仲間の意見から、言い方の異なる様々な要因に気づく。	◇意見を発表させる (予想される意見) ・北と南で色が違う ・川を境目に分かれている ・市街地と離れている地区で違う傾向がある等

<p>ビデオ視聴</p>	<p>4分</p>	<p>○水沢地区の言い方を知る。</p>	<p>→児童の意見を板書 ◇児童の意見として出なかった場合 →水沢の言い方が他の地域では見られないことに注目させる。 ◇地域差（地域によって言葉が違うということに触れる程度）が生じる要因についてまとめる。 ◇水沢地区に注目して見ていくことを伝え、穴埋めプリント（表2）を配布する。 →黒板に同じ資料を貼る。</p>
<p>グループワーク</p>	<p>6分</p>	<p>○組み分けじゃんけんについてのビデオ教材を見る。</p> <p>○各世代の言い方の違いから考える。</p>	<p>◆どんな言い方をしているのか、しっかり聞くように指示をする。→<u>写真⑤</u> ◇ビデオの組分けジャンケンについて質問し、児童の発言から確認する。黒板のプリントに答えを書き込む。 ◇グループの形になるように指示。 →T：この表から何か分かることはあるか考えてみよう。</p>
<p>全体で交流</p>	<p>4分</p> <p>2分</p>	<p>○同じ地域でも、年齢によって言い方が異なることに気づく。</p> <p>○年齢によって言い方の異なる原因を考える。</p> <p>○子どもたちが使っている水沢の組分けじゃんけん<small>の言い方（グッパーインジャンシ）は、祖父母や両親の言い方を引き継いでいるものであることに気付く。</small></p>	<p>◇グループごとに意見を発表させる。 →<u>写真⑥</u> （予想される意見）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年齢によって言い方が全然違う ・語尾の「し」は70～80代の人と同じ ・昔は「組分けじゃんけん」がなかった <p>◇地域差だけでなく、年齢差によっても言い方が異なることを簡単にまとめる。 ◇今の組分けじゃんけんの言い方が、実は「昔のじゃんけんの言い方から徐々に変化して生まれたものであること」に気付かせる。 →ことばは絶えず変化していつていることを伝える。</p>
<p>3. まとめ</p>	<p>4分</p>	<p>○言葉（方言）はたえず変化していくことに気づく。</p> <p>○水沢の言い方は自分たちしか使っていないことを知り、愛着を持ち、また方言の素晴らしさに気づく。</p>	<p>◇今日の授業内容の確認をする。 ◇今日の授業のことを家族とも話してみるように言う。</p>
<p>4. 感想</p>	<p>授業外</p>	<p>○授業を通しての感想を書く。</p>	<p>◇感想用紙の配布 →授業を通して思ったことなどを記入してもらう</p>

2-2 水沢小学校 2011 年実施授業の成果と課題、ビデオ教材作成時の留意点

2-1 節の前年度の授業の事後研修会で出された課題(1)～(3)の内、(1)については、2010 年の 12 月に、水沢小学校の保護者の方***を対象として組分けジャンケン等の遊びことばの言い方とその実演模様をビデオに収録したことで対応できた。また、合わせて、この後三重大生による授業を受ける予定の 5 年生 1 クラス全員を対象に、組分けジャンケン等の遊びことばの言い方とその実演模様もビデオに収録した。これらに、2009 年 8 月に収録済みの水沢地区の 60 代以上の高年層ビデオ画像を加えて、授業で使用する 3 世代間のビデオ教材（全約 2 分半、字幕付き）を授業者の一人である森が、ムービーメーカーで編集制作した。このビデオ教材は、事後研修会時の水沢小学校の先生方からもわかりやすく、良くできていた、との高い評価を受けた。

授業で流すビデオ教材の編集・作成時に、注意しなければならない点は、大きく 2 点ある。1 点目は、ワンカットの画像を 1 回のみ流すのではなく、基本的に 2 回繰り返し流す必要がある点である。さらに、最後に振り返りのまとめの画像も作成し、流すべきである。授業者の三重大生は、準備期間の大学の授業における編集作業の中で、繰り返し複数人物が登場するビデオ画像と共に方言音声（表 3 の（ ）内のかげ声）を視聴しているため、それらの情報が頭に焼き付いている。

しかし、当日、授業でビデオ教材を見せられる子ども達にとっては、初めて視聴する複数の人物画像と方言音声（約 2 分半）なのである。通常、ビデオ教材を見せられる対象が大人であっても、初めての複数の人物画像と方言音声情報を 1 回のみ視聴で、それらの情報を正確に短期記憶から長期記憶に移行させることは、それほど容易なプロセスではない、といえるからである。

2 点目は、字幕とワークシート（表 2）を活用する点である。字幕は、ビデオ画像の音質が良くない場合もある方言発音の理解を視覚的に補ってくれる。また、表 2 のワークシートを配布し、ビデオ教材を見て子ども達に空欄の授業内容のポイントとなる 3 つの回答語形（『ジャンケンモッテ シー』『インジャン シ（チ）』『グッパ インジャン シ』）を書き込ませることで（表 3）、その後の授業の内容をよりスムーズに進められるようになる。上記 2 点の対応をとったことで、2-1 節冒頭の前年度の授業の事後研修会で出された課題(1)～(3)の内、(2)についても改善されたものといえよう。

そして、上述のビデオ画像を見ながらワークシート（表 2）の空欄を埋めることで、表 3 で示すとおり、10 代（子ども達自身）、20 代における㊦の使用語形（グッパ インジャン シ）が、70、80 代（祖父母世代）における使用語形㊧の（ジャンケンモッテ シー）の（シー）と 30、40 代（両親世代）における使用語形㊨の（インジャン シ）並びに㊦の（グッパ～シ）と受け継いできている言語的なつながり（ルーツ）が無理なく、頭の中に入ってくる流れになっている（2-1 節指導案内波線部参照）。

（表 3）水沢地区の各世代における「じゃんけん」と「組分けじゃんけん」との言い方

	㊦じゃんけんのかげ声	㊦組分けじゃんけんのかげ声
70 代～80 代	（ジャンケンモッテ シー）	グーノヒトコッチ パーノヒトコッチ
50 代～60 代	ジャンケンポン	グーパー
30 代～40 代	（インジャン シ・インジャン チ）	グッパ ジャンケンポン・グッパ ジャンケンモッテ シ
10 代～20 代	サイショワゲー ジャンケンポン	（グッパ インジャン シ）

それが証拠に、ビデオ画像に授業受けていた子ども達の中の母親が、登場したこともあり、この山場のビデオ教材を視聴する場面での、子ども達の反応は大いに盛り上がっていた。このように、10 代前

*** 水沢地区出身の保護者の方（39 歳女性・40 歳女性・46 歳男性・47 歳男性）、計 4 名の方に御協力を頂いた。

半の子ども達にも、頭に入りやすいような工夫（ワンカット画像の繰り返しやまとめの画像を入れる、字幕・ワークシートの使用）を行うことで、初視聴の画像と方言音声情報であっても、一見して内容が理解されたものと判断できよう。なお、水沢地区の組分けジャンケンの言い方のように世代間で共通する方言形を授業の題材とすると、子どもの興味をより引きやすく、さらには授業をきっかけとして新しく知った方言形を日常生活の中で積極的に使用するようになった事例が報告されている。余・丹保・鈴木（2009）の中の鈴木による「タバラシテ」（『頂かせて』を意味する）の行事名（日本版ハロウィーン）を取り上げた熊野での授業や萩野（2013）の中の「クスクエ（くしゃみをした相手にかけるおまじないのことば）」を沖縄における授業で取り上げた例が、それに相当する。上記の水沢・熊野・沖縄の事例は共に、村上（2013）で言及されている「身体文化に根ざした学び」を可能にする取り組みとも言え、『今日のこどもたちの個や「ネット」という情報空間に閉ざされた心身のありようを、祖先との連なりという命をめぐる時空間へとひらくことによって、受け継いだ命のかけがえのなさを自らの身体を介して実感させる道筋である』ことを正に示す事例ともいえるだろう。

また、図1の指導案の流れ（全国分布→四日市市の分布→水沢地区内の世代間の共通点）とは、逆行するが、水沢地区の子ども達の組分けジャンケンの使用語形（グッパーインジャンシ）が、少なくとも四日市市内の小学生調査（岡田 2006）においては、水沢地区のみでしか使用されていなかった。この水沢地区の独自性についての授業者の説明は、若干無理のある内容（自然豊かな水沢地区と四日市駅周辺の市街地との環境差によるもの）にならざるを得なかったが、子ども達から複数出た「水沢は田舎だから」という自分の出身地水沢（茶の生産が盛ん）に対するマイナスの意識を「自然に恵まれている」というプラスの意識に少しでも持って行こうとした授業者の姿勢は、本時の目標3（自分の地域のことばに愛着を持つ等）に対応しており、その点で評価できるものと考えられる。よって、前年度の授業の事後研修会で出された2-1節冒頭の課題（1）～（3）の内、（3）についても、筆者の指導不足による問題点は残るが、授業者の課題に対応しようとした努力の跡は評価できよう。

3. 結 語

日常的に使用している各児童の普段着のことば、方言を確認し、且つそのルーツにあたる高年層が多く使用する地域の方言や他地域の方言を公的な教育現場で、ビデオ教材等を有効利用して確認することには、大きな意義を見出せた。平成20年の学習指導要領の改訂を受けて、平成22年度に検定を受けた小学校5社の教科書の内、1社を残して、方言に焦点を当てた単元が無くなった****。しかし、かつて、方言が無駄で蔑視の対象にされていた時期があり、現在も方言に対するそのマイナスの印象が完全に払拭されているとは言い切れない。特に、三重県内の若年層（10代、20代）において、「自分たちが話す三重のことばは、関西弁的だけれども関西弁と言い切れない中途半端なことばだ」という自信喪失気味な言語意識を持っている人たちと筆者は少なからず出会ってきた。決して、看過すべき状況とは言えないであろう。

このような状況下において、特に三重県では、今後もメディアや周囲からの偏見を持たされる度合いの少ない小学校教育（総合的な学習の時間等で）の段階から、冒頭でも触れた一連の「自己の存在価値の確認とその相対化」のプロセスを尊重しつつ、ことば調べ等の言語活動を通じて地元三重の方言について取り上げていくことが、地域に根ざした青少年の健全な生きる力の育成や再生に必要な不可欠であると考えられる。

**** 対して中学校の教科書においては平成23年度の検定後5社中2社の教科書において方言に焦点を当てた単元が無くなった。

4. 今後の課題

かりまた（2013）には、次のような指摘がある。

『方言についての副読本を作成し、それに基づいて教育することによって、学校ごとに体系的で継続的な指導が可能になる』

この指摘に従い、山田（2003）等の各地で既に編まれている方言についての副読本を参考に、まずは、これまで行ってきた四日市市内の方言語彙調査を継続しつつ、その結果に基づいた三重大生によるより充実した授業実践と共に、四日市市の教育現場での使用に耐え得る副読本作りも目指していきたい。

引用・参考文献

- 江畑哲夫（1995）『三重県方言民俗語集覧 1～6』私家版
- 岡田愛弓（2006）『四日市市における遊び言葉の地域差』三重大学教育学部卒業論文
- 荻野敦子（2013）「第1章「伝統的な言語文化」と地域」－国語教科書の実際と沖縄における学びの可能性－『沖縄から考える「伝統的な言語文化」の学び論』村上呂里・荻野敦子【編】 溪水社
- かりまたしげひさ（2013）「琉球方言とその記録、再生の試み 学校教育における宮古方言教育の可能性」『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』田窪行則【編】 くろしお出版
- 岸江信介（1977）『鈴鹿巡見街道方言地図集－鈴鹿山麓北伊勢地域方言の方言地理学的研究－』私家版
- 倉田正邦（1975）『新三重風土記 三重県の歴史と風土』三重文芸社
- 桜井好基（2008）『鈴鹿郡における動物等の昔の呼び名』鈴鹿の国方言研究会
- 塩浜地区社会福祉協議会文化部・塩浜郷土史研究会（編）（2000）『塩浜のあゆみ』「四日市市に合併七十年事業」実行委員会（塩浜地区市民センター内）
- 清水 武（2004）『ふるさとの歴史 水沢の歴史とこぼなし 望郷』水沢郷土史研究会
- 清水正茂（2006）『わが愛する郷土 水沢の今と昔 ～実践を通して見てきた生活（生産活動）の姿～地域・水沢を見つめ直す機会に！』私家版
- 庄司たづ子（2011）「失われた世界との出会い「白いぼうし」」『語り合う文学教育』第9号
- 田邊香奈（2012）『国語科の授業における地域語の使用に関する研究』平成24年度 修士論文 三重大学大学院教育学研究科 教科教育専攻国語教育専修
- 村上呂里（2013）『沖縄から考える「伝統的な言語文化」の学び論』村上呂里・荻野敦子【編】 溪水社
- 森 繁年（2007）『方言と水沢の言葉』私家版
- 四日市市（1990）『四日市市史』第1巻資料編自然
- 四日市市（1993）『四日市市史編さん調査報告第4集 水沢三本松町の民俗』
- 山田敏弘（編）（2003）『みんなで使おっけ！岐阜のことば』岐阜大学教育学部国語教育講座
- 山田敏弘（編）（2008）『ぎふ・ことばの研究ノート』第6集岐阜大学教育学部国語教育講座
- 余 健・山本真吾・鈴木幹夫（2005）「熊野の精神的世界の豊かさを教材にする」『三重大学教育実践総合センター 紀要』25号
- 余 健・鈴木幹夫（2006）「熊野の遊びことばの豊かさを教材にする」『三重大学教育実践総合センター 紀要』26号
- 余 健・岡田愛弓（2008）「四日市市における遊びことばの分布－若年層千人調査から－」『方言研究の前衛』山口幸洋博士古希記念論文集
- 余 健・丹保健一・鈴木幹夫（2009）『世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさを解明と教材開発』平成18～20年度科学研究費・基盤研究（C）報告書 立命館大学産業社会学部 伊藤隆司（研究者代表）
- 余 健（2011）「方言調査の結果を授業に生かす－四日市市水沢地区に焦点を当てて－」『三重大学教育実践総合センター 紀要』31号
- 余 健（編）（2013）『四日市市・内部川沿いの農業地域における言語表現の豊かさを解明と教材開発』2010～2012年度科学研究費・基盤研究（C）報告書 三重大学教育学部

【謝辞】

四日市市教育委員会：倉田浩子先生（現大谷台小学校）、神谷敦巳先生（現常盤西小学校）を始めとする指導課の先生方

水沢地区：坂 正春先生（元水沢小学校校長）、水沢小学校の先生方、水沢小学校保護者の方々、森 真寿朗氏を始めとする水沢地区白寿会の方々

小山田地区：谷村良訓先生（現常盤西小学校校長）を始めとする小山田小学校の先生方、小山田小学校保護者の方々、椎名清信氏を始めとする小山田地区老人会の方々

内部地区：高見一枝校長先生（元内部小学校校長）を始めとする内部小学校の先生方、堀 廣司氏を始めとする内部長寿会の方々

河原田地区：鈴木忠彦先生（元河原田小学校校長）を始めとする河原田小学校の先生方、宮田 勉氏を始めとする河原田地区の方々

塩浜地区：小井誠一先生（現高花平小学校校長）を始めとする塩浜小学校の先生方、佐藤誠也氏を始めとする塩浜地区の方々

上記、皆様のお陰さまを持ちまして、拙論をまとめることができました。お忙しい中、これまで何かと御指導並びに御協力を賜りましたこと、改めて厚く御礼を申し上げます。なお、田中康平を始めとする三重大学教育学研究科大学院生や三重大学教育学部 56 期以降の学部生（日本語学演習 語史・方言Ⅰ、Ⅱの受講生）には、予備調査・本調査の調査員や調査結果の入力等で協力を得ました。